

新知見あれこれ(4)

奥 原 弘 人

H. Okuhara : Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture (4)

1. クスノキ科の間種

昨1984年9月8日、木曽郡檜川村の高遠山でアブラチャンとダンコウバイとの間種とみられるものを発見したので、それを報告したい。

高遠山での調査を終り麓の奈良井駅に向けて急な山道を下る途中海拔1,150m辺で、それより上では見られなかったアブラチャンが現れ、続いてダンコウバイのそばにシロモジの葉のようなものが目についた。よく見ると新しい小枝の先に3浅裂した葉と2浅裂した葉が少数つき、その下にはアブラチャン型の葉がついていて質は薄いがアブラチャンのような光沢はない。これは高さ2mくらいの低木である。

附近を見渡すと、そこはアブラチャンとダンコウバイの混生地であったから途端にこれは両種の間種であると気がついた。果実を見ると径15mm内外でアブラチャンよりは小さくダンコウバイよりは大きい。この両種は別属とする見方もあるが同属とする見方もある近縁であるから間種の生れる可能性はある。

これで解決した問題がある。大分前のことであるが、この地点から遠くない木曽平沢の山地で見た2株の低木の葉はシロモジ型ではあったが、それよりは小さくて薄くシロモジそのものではなく、シロモジの分布域から飛んでいて2株しかない。また数年前松本市里山辺の山地で見たのもやはり同形で上記両種の混生地である。よってこれらを上記両種の間種とみて和名をアブラコウバイとして扱うことにする。この標本は清水会長の同定を得た。感謝の意を表する。

2. オオバセンキュウの変りもの

大井氏の日本植物誌によればオオバセンキュウの小総苞片は糸線形で小梗(10~18mm)よりも短くまたは同長とあるが、今井建樹氏が夏沢峠で採集して同定を求められたのは著しく大きなものである。これを測ってみると長さ3~4cm、最大は5cmのものもあり幅も大は7mmに達し3~4羽状中裂という形となっている。この形のものが多数上に向かって並んでいるから、まことに壮観である。

今井氏の話では同様のものが数株あったという。これを一品種とみて和名をシシザキオオバセンキュウと呼びたい。

3. ツクバネウツギ属の間種を見る

木曽郡山口村にツクバネウツギ属のものでがく裂片が2~5個で2~3個のものには先端が浅裂したものもある。木曽の南部にはツクバネウツギのほかにはコックバネウツギも所々で見られるので、これは両種の間種と考えられる。杉本氏の樹木総検索誌にA. × *integerrima* マルバツクバネウツギとあるのが、これに当たるものと考えられる。

4. フクジュソウ属の花期

北海道教育大学の西川恒彦氏の記載されたキタミフクジュソウはがく片の長さが花弁と同長で、半長のフクジュソウとの主な分類点であるという。

昨年これを観察したところ花期にも差のあることを知った。フクジュソウは木曽福島町と三岳村に多く、キタミフクジュソウは四賀村と白馬村に多い。四賀村の産地は標高750m辺の北向きの雪の残りそうな急斜面の主に疎林内、三岳村は760m辺の北向緩斜面疎林内と780mの日当たりのよい南向急斜面である。

四賀村のキタミフクジュソウは4月初から開花し始め中旬に全体が咲きそろっていたが、三岳村のフクジュソウは4月16日を過ぎてから開き始め中旬に咲きそろった。標高は大体同じであるのに花期には10日くらいの差があった。三岳村の南向斜面は雪も残らず日当たりもよいのに、このようにおそい。

これを松本の自宅に移植したところ四賀村産のキタミフクジュソウは2月15日に開花したが三岳村産フクジュソウは3月15日現在まだ開かない。なお四賀村のキタミフクジュソウの中に花弁の先端が歯牙状になったものと花弁のないものがあった。後者をムベンフクジュソウとよぶことにしたい。

5. アザミの間種

木曽谷にアズマヤマアザミとナンブアザミとの間種とみられるもののあることを本誌12号に報告したが、その後の観察でこれは各地にあることがわかった。これには未だ和名がなく不便であるから両種の漢字名、東山と南部からトウナンアザミとしたい。

6. シロバナサンヨウブシ

先年松田行雄氏が木曽の阿寺国有林でサンヨウブシの白花品を発見された。学名は *Aconitum san-yoense* f. *albiflorus* となる。花の写真は近く出版予定の小著に載せていただくこととした。